

かささぎ通信 第161号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2026年 7月 10日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2026年7月の「森三郎の作品を読む会」では、
「蓬萊（ほうらい）」（児童文学者協会編『日本児童文学選…年刊』第一集、桜井書店、1948年7月）
「ザアカイとユリ」（『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』東京一陽社、1949年2月）を読みました。

「蓬萊（ほうらい）」は、うまいものを食べつくし、面白いことをし尽くした「支那の皇帝」が、さらに「不老不死の薬」を手に入れようとする話です。なかなか吉報が得られない皇帝に、お妃は「定められた命数というものを各々が持つている人間界に、そうしたお薬がたやすく手に入るものとは思われません」と諭し、「羅山の山姫」という童話を語って聞かせます。

羅山のふもとに住む木こりの子の金は、幼い時に父を亡くしましたが、ある時、山の上から響く斧の音に気づきます。まだ寒い春先でしたが、まるで父の斧の音に招かれるように山に登ると、羅山の主の美しい山姫が立っていました。姫は金を一日面白く遊ばせ「おばさんの子にならないか」と言いますが、金は山を下ります。夏になると同じように山に登った金は、豊かに肉づいた山姫の姿を見ます。秋には山姫はひどくやつれて年を取り、寂びた美しさに変わっています。冬になると山姫は真っ白な髪を長く垂らした目の鋭いおばあさんになっていました。次の年の春には去年の春と同じように匂うばかりの美しい山姫が立っていました。山姫は、人間の女のように子供が一人欲しかったのだと打ち明けます。山姫は、「永遠」ということについて自分と人間との違いを金に語ります。山姫は年に一度年を取っては、またあくる年の春若さを取り戻し、それを永遠に繰り返すが、人間は年を取って死んだ後はその子どもに引き継がれるのだということです。お妃は「この世の中には死の安らぎを願っている人々もいることを忘れてはいけない」と皇帝を諭します。その後、皇帝の元に蓬萊の島から不老不死の薬を取ってくるという

う青年が現れます。青年は最近母親を亡くしたばかりだが、昨日の夢に母親が出て、今は「蓬萊」という仙境にいと話したということです。母親は「ここには人間の世の悲しみ、怒り、餓え、欲も何もない、生きていた時の苦しみはこの島での幸福のために定められていたのだ」と語ったと言います。青年は母親に教えられた通り「千人の童子を乗せた赤い船」を東へ東へと進め、蓬萊に行こうとします。ものに満ち足りてます欲を駆り立てられた一人の皇帝の自我によって、千人の子どもたちが千人の母親との悲しい別れをします。話の前半は、『赤い鳥』昭和9年10月号掲載の、三郎の「なぞ（童話）」の中の「春まん丸で、夏になると少し細くなり、秋には糸みたになつて 冬が来れば消えてしまうものは 何だ？」を思い起こさせます。後半は『竹取物語』の「蓬萊の玉の枝」のようであり、千人の子どもたちの命が危うくなった「三色すみれ」「アオイの大臣」など、最近読んだ一連の三郎作品とも似通っています。

「ザアカイとユリ」はタイトルからすぐにキリスト教のイースターに関わりのある話だと想像がきます。若いユダヤ人の詩人だったザアカイは、庭のユリに詩人としての名誉欲を笑われ、物欲に走り収税人となり、おごった暮らしをしています。ある時、ザアカイの住むエリコを救世主キリストが通るといので、町中は大騒ぎになります。庭の桑の木に登ってキリストを見ようとするザアカイに向かって、キリストは、一晩彼の家に厄介になるといいます。その後、ザアカイは自分の財産を手放し、名誉欲も物欲も捨てます。この作品も「生きること」「信仰」をテーマにしています。

〈次回予定〉2026年9月11日（金）午後一時半～三時半、

刈谷市中央図書館2階研修室

※8月は休会

「銀（しろがね）の馬車」「唐（から）からお年だま」

（『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』東京一陽社、

1949年2月）